

平成22年6月8日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820061

研究課題名（和文）九州地方域方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究

研究課題名（英文） A Geolinguistic Study on the History of Reception of Loanwords Introduced by Christian Missionaries in the Kyushu Region of Japan

研究代表者

小川 俊輔 (OGAWA SHUNSUKE)

広島経済大学・経済学部・講師

研究者番号：70509158

研究成果の概要（和文）：本研究は九州地方における渡来語の受容史の解明を目的として実施された。方法は地理言語学的手法によった。まず九州地方各県で方言実地調査を実施し、その結果をデータベース化した。続いて調査項目のうち、Contas と Rosario（カトリックで用いる念珠）を取り上げ、その受容史を論文にまとめた。またキリシタン語彙の多くは、近世のキリシタン禁制時代以降絶滅に向かっていていたが、近年、バテレン、クルスなどの語が商品名として利用されるようになるなど、復活する動きを見せていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this geolinguistic study was to elucidate the history of the reception of Loanwords Introduced by Christian Missionaries in the Kyushu Region of Japan. In conclusion, the following can be pointed out: 1) almost all words for example <inferno>, <contrição>, <confissão> have generally decayed. 2) parts of the words such as <Christão>, <gentio> are used as general nouns with discriminatory meaning. 3) Some people still try to preserve <contas> against the guidance of Catholic priests. 4) Recently, parts of the words such as <cruz> and <padre> have started to be used as the names of some alcoholic drinks and sweets. Thus, in this district, the number of people who use these words has been increasing again. This is the restoration of Loanwords Introduced by Christian Missionaries.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	660,000	198,000	858,000
2009年度	560,000	168,000	728,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,220,000	366,000	1,586,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言学、地理言語学、社会言語学、日本語学、キリシタン語彙、渡来語

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

文献国語史の分野には渡来語(16世紀中期以降のキリシタン伝来とともに日本へ伝えられた外来語)を扱った多くの先行研究があるけれども、九州地方全域における方言実地調査にもとづいて、どの地域でどのように各語が受容されたのかを地理言語学的手法によって考察した研究はこれまで見られなかった。そのような状況下にあって研究代表者は、2003年以降、渡来後の受容史に関する地理言語学的研究を進めてきた。本研究はその延長線上に位置付くものである。

2. 研究の目的

本研究の第1の目的は、九州地方における渡来語の受容史の解明である。他方、地理言語学における新しい言語地図解釈方法の開発と実践も本研究の目的である。具体的には、政治史・宗教史と方言分布との関係、宗教的な意味を持つ語(天国、地獄、信者など)の受容と拒絶の実態などについて方法論の開拓にも重点を置きながら考察を行う。これらは従来地理言語学では用いられてこなかった方法論である。

3. 研究の方法

研究の方法(手順)は下記(1)~(4)のとおりである。

(1) 資料収集(方言資料, 文献資料)

方言資料は研究代表者が実地調査によって集めた。調査票は、研究代表者が学位論文執筆の際に用いたものを使用した(88項目, pp. 1-42(B5版), 平均調査所要時間80分)。カトリック教会や教育委員会などしかるべき機関に被調査者として適任者をご紹介いただき、調査を行った。

文献資料は影印版、翻刻版の公刊されているものについて購入した。未公刊のものについては、資料を所有する機関を訪問して調査を行った。

(2) 資料のデータベース化(方言資料の地図化, 文献資料の電子化)

(1)によって得られた方言資料をエクセルデータへと電子化し、その後、MandalaなどGISソフトを用いた方言地図作成を行った。調査によって得た文献資料も電子化し、データベースの作成を行った。

(3) 文献資料と地図化された方言資料を用いて一語ごとに受容史を考察

(2)によって作成された方言分布地図及び文献資料から、一語ごとに受容史の考察を行

った。この際、キリシタン禁制→解禁という政治史、潜伏キリシタン・カクレキリシタンの存在、カトリック教会の分布密度、被調査者の帰依する宗教、被調査者のキリスト教・キリスト教徒に対する意識などの言語外諸情報と方言分布との関係について考察を行った。

(4) 各語史を重ね合わせ渡来語全体の受容史を考察

(3)によって導かれたそれぞれの語史を相互に比較しながら、「渡来語」の受容史全体について考察を行った。

4. 研究成果

(1) 当初の計画どおり、九州地方における方言実地調査を実施し、これまでの調査結果と合わせてデータベース化を終えた。

(2) キリシタン資料や幕末明治期に長崎で出版された文献資料、さらに文献国語史の方法によるキリシタン語彙に関する先行研究(書籍・論文)を収集し、研究態勢を整えることができた。

(3) ContasとRosario(カトリックで用いる念珠)の受容史を論文にまとめ、Spainの方言に関する国際学術雑誌(審査有)Dialectologiaに英文で掲載した。その要旨は、次のとおりである。

① ‘Contas’ was received as the name of a tool in “K&R distribution area” — Coastal area and Remote island area of Northwest Kyushu region. In addition, ‘Contas’ was handed down over centuries by Hidden Christians up until about 1870.

② ‘Rosario’ has been received as a new word by Catholic believers since about 1870. Catholic propagators of the age had a consciousness that ‘Rosario’ was the best name for the Rosary (a string of prayer beads, or a series of prayers), but Catholic believers of the same age mainly used ‘Contas’ instead of ‘Rosario’ as the name of a rosary.

③ Nowadays, ‘Rosario’ has come to be used in lieu of ‘Contas’ in Coastal area and Remote island area of Northwest Kyushu region where ‘Contas’ had been used from the 16th century onward, and the distribution area of ‘Rosario’ is now being expanded along with the propagation of Catholic Churches in the Central part of Kyushu region, whereas in the Southeast

Kyushu region where the faith in the Catholic Church has not been well established, 'Rosario' is yet to be fully received.

(4) これまで一語毎に考察してきた渡来語の衰退、保存、復活の実態について複数の語を同時に扱い、方言分派系脈論(方言区画論)の方法に倣って整理した。それを On the Decay, Preservation and Restoration of the Christian Vocabularies in the Kyushu District of Japan after the 16th Century と題して、International Society of Dialectology and Geolinguistics 6th International Congress(2009年9月16日、マリボル大学、スロベニア)で発表した。席上、研究代表者が報告した「バテレン、クルスなどの渡来語が焼酎や菓子類の商品名として利用されており、しかもその命名者はキリスト教徒ではない」という事実について、ドイツやイタリア、フランス、スペインなどでも同じ現象がみられることが報告され、世界的な現象であることが確認された。

国際会議での質疑応答をふまえて On the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16th century と題を改め、Slovenia の国際学術雑誌(査読有)に投稿し、掲載が決定した。その要旨は、次のとおりである。

The aim of this paper is to elucidate the history of the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16th century. In conclusion, the following can be pointed out: ① almost all words have generally decayed. ② parts of the words are used as general nouns with discriminatory meaning. ③ Some people still try to preserve these words against the guidance of Catholic priests. ④ Recently, parts of the words have started to be used as the names of some alcoholic drinks and sweets. Thus, in this district, the number of people who use these words has been increasing again. This is the restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary.

(5) 以上、2篇の論文が国際学術雑誌(査読有)に英文で掲載されたことから分かるように、渡来語(とりわけキリシタン語彙)の受容史に対する関心は、国内よりもむしろ海外で高く、本研究の成果は国内外の方言学・地理言語学に貢献しうるものであることが確

かめられた。

他方、2年間の研究期間において国内における研究成果の発表は必ずしも十分ではなかった。但し、2010年5月26日現在、1篇の論文を国内学術雑誌(査読付)に投稿し、現在査読過程が進行中であり、別に1篇の論文が共著書の一部として2010年度内に出版される予定となっている。

(6) 研究代表者が所属大学の研究集会において発表した内容の発表要旨が所属大学の紀要に掲載された。その要旨は次のとおりである。

九州地方におけるキリシタン語彙「paraiso」の受容史は、大略次のようにまとめることができる。

① 中世期にキリシタン宣教師の言語戦略を背景として「paraiso」が受容された。「paraiso」は、潜伏キリシタン・カクレキリシタンの人びとにより、禁教時代を経て現代まで伝承された。明治以降、カトリック信者の間でも「paraiso」は用いられた。しかし、カトリック教会における「paraiso」は次第に「天国」に取って代わられていった。

② 「天国」は、明治初期に邦訳聖書の中で使用され始めたことばである。その後、キリスト教徒以外の人びとにも受容され、使用され始めている。また、一部の人びとの間では、幼年者に対する配慮表現として使用されている。他方、「天国」はキリスト教のことばである」という意識を持つ仏教徒は、「天国」を受容せず、明確な意志をもってその使用を避けている。

③ しかし、「天国」がキリスト教のことばであるという意識が薄れるにつれ、「天国」と「極楽浄土」類との併用が進んできている。今後は、仏教的文脈においてのみ「極楽浄土」類が使用され、一般的な「善人の行く死後の世界」を表す語としては、「天国」が使用されることになるものと考えられる。

以上の結論のうち、語の拒絶のありようについては、管見の限りこれまで日本の国語史研究・方言研究では指摘されたことのない興味深い事実である。今後、学術論文として成果をまとめる予定である。

(7) 上記の他、若年層における渡来語の使用実態について福岡女学院大学及び広島大学の学生を対象にアンケート調査を実施した。福岡女学院大学では127名、広島大学では63名の学生から回答を得た。調査結果は現在整理中である。若年層の調査結果は、渡来語の将来を予測するための貴重な資料である。この資料の分析も今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① OGAWA Shunsuke、On the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16th century, *Slavia Centralis*, 査読有、vol. 1、2010、pp. 150-161
- ② OGAWA Shunsuke, A GEOLINGUISTIC STUDY ON THE HISTORY OF RECEPTION OF 'CONTAS' AND 'ROSARIO' IN THE KYUSHU DISTRICT OF JAPAN AFTER THE 16TH CENTURY, *Dialectologia*, 査読有、vol. 4、2010、pp. 83-106、
<http://www.publicacions.ub.es/revistes/dialectologia4/>
- ③ 小川俊輔、キリシタン語彙の受容史について－「極楽」, 「浄土」から「天国」へ－、*広島経済大学研究論集*、査読無、第32巻第1号、pp. 93-99、
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/bitstream/harp/4619/1/kenkyu1980320107.pdf>

[学会発表] (計4件)

- ① OGAWA Shunsuke, On the Decay, Preservation and Restoration of the Christian Vocabularies in the Kyushu District of Japan after the 16th Century, *International Society of Dialectology and Geolinguistics 6th International Congress*, 2009年9月16日、University of Maribor, Slovenia
- ② 小川俊輔、九州地方域方言における「天国」の受容史について、九州方言研究会、2009年7月4日、佐賀大学
- ③ 小川俊輔、キリシタン語彙の受容史について－「極楽」, 「浄土」から「天国」へ－、*広島経済大学経済学会研究集会*、2009年1月29日、広島経済大学
- ④ 小川俊輔、新語の受容と拒絶、*広島方言研究会*、2008年11月8日、県立広島大学

[図書] (計2件)

- ① 小川俊輔、他、*大修館書店*、これが九州方言の底力!、2009、pp. 64-67
- ② OGAWA Shunsuke, 他、University of

Maribor, Faculty of Arts, Department of Slavic languages and Literature, 6th SIDG CONGRESS, 2009、pp. 75-76

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 俊輔 (OGAWA SHUNSUKE)
広島経済大学・経済学部・講師
研究者番号: 70509158

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし